壱岐フィールドワーク報告





1. はじめに

私たち上智大学地球環境学研究科（教員 1 名、学生 9 名）は、2026 年 7 月 31 日（金）から 8 月 3 日（月）まで、長崎県壱岐市でフィールドワークを実施した。学生は「観光×環境」「資源循環」「文化継承」の 3 チームに分かれ、それぞれのテーマに沿って現地視察や関係者へのヒアリングを行い、壱岐市が抱える課題や地域資源の可能性について考察した。

壱岐市役所の協力のもと、初日は壱岐の蔵酒造、バナナファーム壱岐、2 日目はリーフボールジャパン、なかはら陸上養殖場（とらふぐ・ヒラメ）、壱岐オリーブ園、壱岐大大神楽、3 日目は壱岐イルカパーク＆リゾート、住吉神社、月讀神社を訪問した。最終日は各チームが現地で得た知見をもとに地域の課題を整理し、壱岐市の持続可能な発展に向けた提案を市長および市役所の幹部職員に発表した。そこで得たコメントや課題をもとに内容を再検討し、9 月 29 日（火）にオンラインで改めて壱岐市役所に提案を行った。以下、各訪問先の概要と各チームの視点から得られた学びや考察を紹介する。

2. 訪問先

2.1 壱岐の蔵酒造



壱岐の蔵酒造は、麦焼酎発祥の地とされる壱岐島で、伝統的な「米麹 1：大麦 2」の製法を受け継ぐ酒蔵である。1899 年の酒税法施行以降、島内に数多くあった焼酎蔵は統廃合が進み、1984 年に 6 蔵が集まって壱岐焼酎協業組合を設立し、2010 年に現在の社名へ変更した。近年は伝統的な焼酎造りに加え、規格外のアスパラガスやイチゴ、柚子加工時の副産物など、島内で十分に活用されてこなかった農産物を原料に用いたクラフトジンの開発にも取り組んでいる。酒造技術を生かしながら、地域資源の有効活用と新たな商品価値の創出を進めている。

＜文化継承チーム＞

壱岐の蔵酒造では、焼酎づくりが壱岐の農業や食文化と深く関わっていることが分かった。焼酎は日常の飲み物であるだけでなく、神様へのお供えや地域の行事にも関係している。このことから、地域の自然の恵みは、食文化を通して人々の伝統や信仰にもつながっていると考えられる。

＜観光×環境チーム＞
酒蔵見学やオリジナルジンづくりは、単なる観光体験ではなく、壱岐の産業や農業、地域資源への理解を深める機会となる。旅行者が生産現場に触れることで、地域の営みをより身近に感じ、壱岐ならではの価値を知るきっかけになると考えた。

＜資源循環チーム＞
クラフトジンに島内の規格外農作物を使用していることや、製造途中の残渣も自主的に活用しようとしており、資源循環に積極的に取り組む姿勢から多くを学んだ。また、残渣の活用については課題も多く、取り組みの難しさについても伺うことができた。資源循環は一社だけでは限界があり、島内全体の課題として共有することが重要と考えられる。

2.2 バナナファーム壱岐



バナナファーム壱岐は、壱岐市芦辺町で農薬を使わず「壱岐王様バナナ」を栽培する農園である。品種は、かつて台湾バナナとして親しまれたグロスミッチェルで、完熟すると皮ごと食べられるのが特徴である。約 150 本から始まった栽培は現在約 540 本まで拡大し、年間約 2 万本を収穫している。農園ではガイド付きのハウス見学を受け入れるほか、バナナジュースや菓子などの加工品も開発しており、農産物の生産だけでなく、観光農園として壱岐の新たな特産品と来訪動機の創出にも取り組んでいる。

＜資源循環チーム＞
今回の見学を通じて、地域資源の価値は、その資源自体だけでなく、加工方法や活用の仕方によっても高められることを学んだ。特に印象に残ったのは、農園で販売されていた 3D プリント商品である。3D プリントは金型を必要とせず、デザインを変更することで少量・多品種の商品を製作できるため、地域の特色を生かした商品づくりに適していると考えた。この経験をきっかけに、壱岐の課題である海洋プラスチックごみを 3D プリント材料として再利用できないかと考えた。回収したプラスチックを再資源化し、壱岐らしい商品や観光体験につなげることで、廃棄物の処理だけでなく、新たな地域価値の創出にもつながる可能性がある。ただし、海洋プラスチックは材質や劣化状態がさまざまであるため、実際の活用には技術的な検証が必要である。今後は、地域の企業や研究機関との連携を通じて、環境保全と地域経済の両立を目指すことが重要だと考えた。

＜観光×環境チーム＞
農薬を使わない栽培方法や生産現場を実際に見ることで、旅行者が壱岐の農業や環境への取り組みを身近に学べる点に可能性を感じた。農園見学を観光体験として発展させることで、地域産業への理解を深め、壱岐ならではの持続可能な観光につながると考えた。

＜文化継承チーム＞
バナナファーム壱岐では、農業を通して地域の自然や資源を活用することの大切さについて考えた。農業は食べ物を生産するだけでなく、地域の魅力を伝える役割も持っている。農業体験などを通じ

て、若い世代や島外の人々が壱岐の自然や文化に触れる機会をつくることは、地域への愛着を深め、伝統を次の世代につなぐことにも役立つと考えられる。

2.3 リーフボールジャパン



一般社団法人リーフボールジャパンは、磯焼けによって失われた藻場の再生に取り組む団体である。穴の開いた球状のリーフボール（人工魚礁）を海中に沈め、海藻が根づき魚や貝が集まる場所をつくる。リーフボールは小型で扱いやすいため、地域住民や子どもたちも設置の作業に参加でき、海を守る活動を、地域の仕事や教育につなげようとしている。

＜資源循環チーム＞

リーフボールジャパンは藻場を再生することで海洋生物の生息環境の改善や繁殖の促進、海洋資源の保護に取り組んでいる。このような現状の資源を循環するだけでなく、新しい資源循環を作るという新たな視点が大変勉強になった。

＜文化継承チーム＞

リーフボールジャパンへの聞き取りから、海の環境と人々の暮らしの関係について学んだ。壱岐で育った事業者は、子どもの頃には豊かな海で貝やウニなどを採る経験をしていたが、現在は海藻や魚が減少するなど、海の環境が変化していると感じていた。このことから、自然との精神的なつながりは、自然を身近に感じる経験によって育まれると考えられる。また、海の環境を回復する活動は、自然を守るだけでなく、地域の人々が海への関心や愛着を取り戻すきっかけにもなる。特に、子どもたちが自然に触れ、その変化を実感できる機会をつくることは、将来の環境保全意識を育てるうえでも重要である。

＜観光×環境チーム＞

藻場再生の活動に旅行者が参加できれば、海の現状を「見る」観光から、回復に「関わる」観光へと発展させられる。訪れた人が島の自然の再生に加わる体験は、壱岐との継続的な関係を育てる入口になると考えた。

2.4 なかはら陸上養殖場　とらふぐ＆ヒラメ



なかはら陸上養殖場は、地下から汲み上げた海水と淡水を使う「低塩分陸上養殖」で、とらふぐとヒラメを育てている。雑菌の少ない地下水を使うので魚が病気になりにくく、薬品をほとんど使わずに育てられる。養殖場では、壱岐市の再生可能エネルギーの実証実験として、太陽光発電と水素の貯蔵を組み合わせた取り組みも行われている。

＜資源循環チーム＞

なかはら陸上養殖場では、水の循環利用と再生可能エネルギーの活用に取り組んでいる。まず水の循環については、とらふぐの養殖のために、地下水を汲み上げて利用し、そのうちの約 8 割をろ過によって再利用している。また、残りの約 2 割はヒラメの養殖に活用していることがわかった。次に、再

生可能エネルギーの利用については、壱岐市役所の実証実験として実施されており、養殖場の隣接地に設置された太陽光パネルによって、養殖に必要な電力を賄っている。さらに、発電によって生じた余剰電力を利用して水を電気分解し、酸素と水素を生成・貯留している。生成された水素は夜間の電力として、酸素は養殖水への供給やろ過に必要な酸素として利用されている。今後は病院でも同様の実証実験が行われる予定であることもわかった。これらの取り組みから、水やエネルギーの利用状況については具体的な数値を把握し、循環利用の仕組みが構築されている点が印象的であった。一方、排出されているが、量を把握していない副産物もあったため、それらを堆肥として再利用できる可能性を検討することが資源循環の観点から重要であると考えた。

＜文化継承チーム＞
陸上養殖について学ぶことで、海の資源を利用する方法が変化していることについて考えた。自然の海で魚を採るだけでなく、人間が管理する環境で魚を育てることも、現在の食文化を支える方法の一つである。一方で、養殖技術が発展しても、魚や海が地域の暮らしにとって大切な存在であることは変わらない。今後は、養殖や地域の食文化を通して、海の環境や資源の大切さについて学ぶ機会をつくることも重要だと考えられる。

＜観光×環境チーム＞
陸上養殖と再生可能エネルギーの実証の現場は、一般の旅行者がふだん目にする機会の少ない「島の未来の産業」を学べる場である。教育旅行や視察型の観光と組み合わせれば、壱岐の環境への先進的な取り組みを伝える資源になると考えた。

2.5 壱岐オリーブ園



壱岐オリーブ園は、高齢化などにより増加した遊休農地の活用をきっかけに、2010 年からオリーブ栽培を始めた。現在は約 15 ヘクタールの農地で 7,000 本を超えるオリーブを栽培し、国産オリーブオイルのほか、剪定した葉を活用したオリーブ茶やスキンケア用品なども開発している。さらに、搾油後の残渣を鶏の飼料に、鶏ふんを堆肥として畑に戻すなど、農園内で資源を循環させる仕組みも築いている。オリーブ畑の先に海を望む景観も特徴で、農業、ものづくり、観光が結びついた場となっている。

＜資源循環チーム＞
壱岐オリーブ園では、資源を循環させる仕組みを実現している。農園で生じる残渣のほとんどは、家畜の飼料や土壌の肥料、雑貨などに再利用されている。一次産業における資源循環として理想的な循環モデルであることを感じた。このように、残渣を異なる用途へとつなげることによって資源を有効活用する仕組みは、持続可能な農業を実現する上で重要であると考えた。

＜観光×環境チーム＞
オリーブ畑の景観を楽しみながら、栽培や商品づくりの背景を生産者から直接学べる点に観光資源としての可能性を感じた。農園見学や試食・購入を通じて、旅行者が地域の農業や環境への取り組みを

知り、商品だけでなくその背景にある価値まで持ち帰る体験につながると考えた。

＜文化継承チーム＞
壱岐オリーブ園では、農業と地域の魅力を結びつけることについて考えた。地域の自然を活用した農業は、産業としての役割だけでなく、壱岐の風景や暮らしを島外の人々に伝える役割も持っている。自然とのつながりを次の世代に伝えるためには、自然を守ることだけでなく、実際に自然に触れ、その価値を知る機会を増やすことが大切である。また、島外の人々が農業や地域文化を体験することは、壱岐の魅力を再認識し、地域への理解を深めることにもつながると考えられる。

2.6 壱岐大大神楽



壱岐では神職によって奉納される神事芸能が伝承されていて、国の重要無形民俗文化財に指定されている。今回見学したのは、この本行事とは別に、保存会と観光協会によって開かれている公開演舞だった。本行事の「住吉神社奉賛神楽（壱岐大大神楽)」は毎年 12 月 20 日に住吉神社で開催され、県内外から多くの人が訪れる。

＜文化継承チーム＞
壱岐大大神楽について調べる中で、伝統文化の継承には、人から人へ技術や知識を伝えることが重要だと分かった。神楽の舞や笛の製作などには、長い時間をかけて受け継がれてきた技術が関わっている。しかし、担い手の減少や、材料となる自然資源を得ることの難しさが、継承の課題となっている。また、人口減少や地域共同体の縮小によって、伝統行事を維持するための人手や機会も少なくなっている。このことから、伝統文化は人間の努力だけで守れるものではなく、それを支える自然環境や地域社会とも深く関係していると考えられる。文化を未来に残すためには、技術を教える機会を増やすとともに、その文化を支えてきた自然についても理解を深める必要がある。

＜観光×環境チーム＞
壱岐神楽を含む全国の神楽を、ユネスコ無形文化遺産に登録しようとする動きがあり、今後は国内外からの関心が一層高まると考えられる。公開演舞は旅行者が島の信仰文化に触れる貴重な機会である。一方で、本来は神事であることを伝える案内や鑑賞のマナーを整え、文化が消費されずに受け継がれる受け入れ方を考えることが大切だと考えた。

2.7 壱岐イルカパーク&リゾート



壱岐イルカパーク＆リゾートは、天然の入り江を仕切って造られた海浜公園で、カフェで休憩したり、釣りやバーベキュー、SUP、カヤックなどを楽しんだりすることもできる。閉園後には一日一組限定のキャンプ宿泊も受け入れており、イルカの暮らす海のそばで夜を過ごすことができる。

＜資源循環チーム＞
今回の訪問では、壱岐とイルカの歴史的な関係について学んだ。かつて壱岐では、イルカによる漁業

被害が問題となり、漁業者とイルカの関係には対立もあった。しかし、現在のイルカパークでは、イルカを単なる漁業への脅威として捉えるのではなく、人とイルカが共に生きる関係を目指していることが印象に残った。資源循環チームとして、今回の訪問から考えたのは、地域の自然資源をどのように利用し、守りながら次の世代につなげていくかという点である。イルカとの関係の変化は、地域の自然環境を一方的に利用するだけでなく、共存という視点から捉え直すことの重要性を示していると感じた。また、観光施設としての運営と海洋環境の保全をどのように両立させるかについても、今後考えていく必要がある。地域の歴史や自然環境を理解した上で、観光と環境保全の両立を目指すことが、持続可能な地域づくりにつながると考えた。

＜文化継承チーム＞

壱岐イルカパーク&リゾートへの聞き取りから、人間とイルカの関係が変化してきたことを学んだ。以前はイルカを見せることが中心だったが、現在はイルカの行動を観察し、イルカとの関係やコミュニケーションについて学ぶことも重視されている。 また、人間は動物のことを完全に理解できるわけではないという考えも重要である。イルカとの関係を通して、自然や動物を人間のためだけに利用するのではなく、相手を理解しようとする姿勢が大切だと考えられる。 さらに、動物との交流や観察を通じた体験は、特に子どもたちが自然に関心を持つきっかけにもなる。自然と触れ合う機会が減少している現代において、このような体験の意義は大きい。

＜観光×環境チーム＞

閉園後のパークに一日一組だけが泊まれるキャンプは、夜の入り江でイルカの呼吸音に耳を澄ませるという、壱岐ならではの滞在体験である。触れ合う楽しさだけでなく、イルカの意思を尊重する飼育の考え方や、漁業との対立を経た地域の歴史まで伝えることで、学びと共生の視点を持ち帰る観光拠点になり得ると考えた。

2.8 住吉神社



住吉神社は壱岐の総鎮守とされる古社である。島内にある式内社 24 社のうち、特に格式の高い名神大社 6 社の一つに数えられ、明治 4 年（1871 年）には国幣中社となり、壱岐で唯一の官社となった。入口の夫婦楠は、一つの根から二本の幹に分かれており、縁結びや長寿の木として親しまれている。境内には古くから水の涸れない神池があり、池の底からは 17 面ほどの古い鏡が見つかっている。毎年 12 月には、ここで壱岐大大神楽が奉納される。

＜文化継承チーム＞

住吉神社の神職への聞き取りから、壱岐では、山や岩、池などの自然そのものが信仰の対象となってきたことが分かった。壱岐には多くの神社や祠があり、船やホテルなど、日常生活に身近な場所でも神様が祀られている例が見られた。このことから、自然と信仰は別々のものではなく、人々の生活の中で結びついてきたと考えられる。しかし、時代が変わるにつれて、自然そのものよりも、神社の建物やお守り、特定の行事などに注目が集まるようになった可能性がある。信仰が完全に失われたわけではないものの、日常的な祈りから初詣や祭りなどの特別な機会へと、関わり方が変化していること

も考えられる。また、地域の人口減少や氏子の高齢化によって、神社の維持や伝統行事の開催が難しくなっていることも課題である。一方で、若い世代も、きっかけがあれば神社や地域の伝統に興味を持つ可能性がある。御朱印やイベント、祠を訪れる体験などを入口として、神社の歴史や自然との関係を伝えることが、文化継承につながると考えられる。ただし、今回の調査は主に一人の神職への聞き取りに基づいているため、壱岐全体の信仰の変化を明らかにするには、さらに多くの住民への調査が必要である。

＜観光×環境チーム＞
住吉神社は観光客が少なくなる冬に島を訪れる理由となり、来訪の時期を分散させる効果が期待できる。一方で、大大神楽は地域の人々が大切に守ってきた神事であり、訪れる側には、その場にふさわしい振る舞いが求められる。祈りの場に招かれるという意識を持てるよう、事前に作法を伝える工夫が必要だと考えた。

2.9 月讀神社



月讀神社は芦辺町国分にあり、月讀命（つくよみのみこと）を祀る。『日本書紀』には、壱岐の月神が山城国に分霊されたとする記述があり、京都・松尾大社の摂社である月読神社は、その流れをくむと伝えられている。鳥居をくぐって急な石段を上ると、木々に包まれた森の中に社殿が静かにたたずんでいる。

＜文化継承チーム＞
月讀神社を訪問し、神社が地域の歴史や信仰を知るための大切な場所であることを改めて考えた。神社を訪れることは、単に参拝するだけでなく、地域の人々が自然や神様とどのように関わってきたのかを考える機会にもなる。壱岐では、自然や信仰が日常生活に溶け込んでいるため、島民自身がその文化的・歴史的価値を十分に意識していない可能性もある。そのため、神社の由来や地域に伝わる話を若い世代や島外の人々に伝え、身近な文化の価値を再認識できる機会をつくることが重要である。

＜観光×環境チーム＞
森に包まれた境内は、静けさそのものが訪れる価値となっている場所である。来訪者が増えると、その静けさや森の環境が損なわれるおそれもある。由緒や参拝の作法を伝え、地域の信仰を尊重する訪れ方を促すことが、持続可能な観光には欠かせないと考えた。

各チームは、現地での視察やヒアリングから得られた情報を整理し、地域の課題とその解決に向けた方策を検討した。8 月 3 日に壱岐市長らに提案を行い、その際にいただいた意見や課題を踏まえて内容を再検討した。9 月 29 日にはオンラインで再び発表し、以下の 3 つのテーマについて提案を行った。

3. 提案内容

＜文化継承チーム＞
壱岐の自然と伝統文化のつながりを若い世代に伝えるため、「自然への感謝」をテーマにしたワークショップを提案した。具体的には、神社の神職や地域の専門家から、壱岐の自然信仰や伝統について話

を聞いた後、小さな祠をイメージした作品を制作する。材料には、許可を得て集めた落ち葉や枝、流木などを使用する。実際の神社の信仰や儀式とは区別し、自然への感謝を表現する環境教育として実施する。この活動は、地域の文化的価値を知識として学ぶだけでなく、実際に自然に触れながら体験することを重視する。参加者が作品を自宅に持ち帰ることで、ワークショップの後も自然への感謝や地域文化について考えるきっかけをつくる。また、親子や若者、島外からの参加者が一緒に活動することで、世代や地域を越えた交流にもつなげたい。さらに、祠を巡るフォトラリーやマップ作りなどを組み合わせれば、普段は気づきにくい身近な祠や神社を知る機会にもなる。将来的には、学校や地域の事業者、神社などと協力して継続的に開催することで、文化への理解を深めるとともに、神社や地域の体験型観光への関心を高め、地域経済への貢献も目指す。

＜観光×環境チーム＞
壱岐の持続可能な観光に向けて、「再生型観光」の導入を提案した。再生型観光とは、観光による負の影響を抑えるだけでなく、観光を通じて自然や文化、地域社会をより良い状態へ育てる考え方である。現地では、再訪のきっかけは景色よりも人とのつながりにあるという声が聞かれた。一方で、観光の負荷が特定の場所や季節に偏るという課題も見えた。そこで、ふるさと住民登録制度を関係づくりの入口と位置づけ、登録者数だけでなく、再訪率や地域貢献活動への参加率など「関係の深まり」を測る KPI を提案した。あわせて、繁忙期に地域の仕事を手伝いながら暮らす滞在や、閑散期に 2 週間ほど暮らすように旅する滞在など、新しい関係人口のあり方も示した。入島税のような観光客から財源を得る仕組みを導入する場合には、海洋ごみの回収や文化の継承など地域の課題解決に使い、使途の決定に住民が参加し、その成果を公開する仕組みを提案した。観光消費額に加え、「壱岐がより良くなったか」を測る評価軸を設けることを目指している。

＜資源循環チーム＞
壱岐市の資源循環を促進するため、島内の連携を担う組織が島内事業者の情報を集約し、事業者間の連携を支援する仕組みを提案した。具体的には、第一に、陸上養殖場で行われている再生可能エネルギーの実証実験において、発電量や電力需要、水素製造量などが把握できていることを事例として、他の施設や住宅におけるエネルギー利用状況を把握し、導入可能性のある場所への展開を検討する。第二に、農産物や水産物の副産物について、種類・量・発生時期・処理費用を把握することでデータ化し、必要とする事業者とのマッチングを行う。第三に、島に流れ着く海洋プラスチックの種類や量、状態を把握し、再資源化や 3D プリントによる商品化を検討する。島内の連携を担う組織がデータの可視化とネットワーク形成のハブとなることで、廃棄物処理費の削減、新たな収益や雇用の創出、島内外の連携につなげ、地域経済の活性化と資源循環の両立を目指す。

4. 今後の展望
今回のフィールドワークを通じて、壱岐市では自然環境の保全、資源循環、文化継承に向けた多様な取り組みが進められていることを学んだ。一方、それぞれの活動を地域全体の持続可能な発展につなげるためには、行政、事業者、住民などの連携が重要である。今後は、各チームが提案した施策について、実現可能性や期待される効果、課題をさらに検討する必要がある。

5. おわりに

自然との精神的なつながりを未来に残すためには、昔の伝統をそのまま守るだけでなく、現代の生活に合った方法で伝えていくことも大切である。自然に触れ、地域の歴史や信仰について学ぶ機会を増やすことが、島民自身の文化的価値の再認識や地域への愛着を深め、持続可能な文化継承につながると考える。今回のフィールドワークでは、現地視察や関係者へのヒアリングを通じて、地域が抱える課題を多角的に捉えることの重要性を学んだ。また、異なる専門的関心を持つ学生が議論を重ね、壱岐市への提案をまとめる過程は、教室で学んだ知識を現実の地域課題に結びつける貴重な機会となった。現地での提案に対するフィードバックを踏まえ、追加調査と再提案を行った経験からも、地域との対話を重ねながら解決策を検討することの重要性を実感した。



織ゼミインスタグラム https://www.instagram.com/ori_seminar/